

学校推薦型選抜（公募制）経済学部（1・2部）

人口減少が北海道の地域社会経済の大きな課題となっています。他方で、外国人の在留者は増加傾向にあります。それに関する以下の3つの表を参考にして、問1～3まで答えなさい。

問1）表1、表2からわかることを述べなさい。（300字程度）

表1 北海道で暮らす外国人人数の推移

単位：人、%

	2005年		2010年		2015年		2020年	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
総数	15,650	100.0%	18,280	100.0%	21,676	100.0%	34,321	100.0%
韓国、朝鮮	4,298	27.5%	3,980	21.8%	4,089	18.9%	4,074	11.9%
中国	6,153	39.3%	8,390	45.9%	8,878	41.0%	9,548	27.8%
フィリピン	824	5.3%	994	5.4%	1,183	5.5%	2,057	6.0%
タイ	136	0.9%	229	1.3%	440	2.0%	619	1.8%
インドネシア	121	0.8%	154	0.8%	221	1.0%	681	2.0%
ベトナム	113	0.7%	133	0.7%	1,478	6.8%	8,770	25.6%
イギリス	210	1.3%	223	1.2%	266	1.2%	352	1.0%
アメリカ	827	5.3%	806	4.4%	997	4.6%	1,090	3.2%
ブラジル	207	1.3%	143	0.8%	125	0.6%	144	0.4%
ペルー	35	0.2%	35	0.2%	27	0.1%	44	0.1%
その他	2,726	17.4%	3,193	17.5%	3,972	18.3%	6,942	20.2%

出所：「国勢調査」各年版。

表2 北海道の在留資格別外国人労働者数の推移

単位：人（%）

（%）

在留資格	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	増減率 (2020-15対比)
外国人技能実習生	5,583 (45.1)	6,749 (44.8)	8,553 (48.2)	10,357 (49.3)	12,946 (53.1)	13,400 (52.8)	140.0
専門的・技術的分野の在留資格	2,148 (17.4)	2,680 (17.8)	3,273 (18.4)	3,843 (18.3)	4,637 (19.0)	5,392 (21.3)	151.0
資格外活動 (留学アルバイト等)	2,360 (19.1)	3,063 (20.3)	3,231 (18.2)	3,749 (17.8)	3,355 (13.8)	2,812 (11.1)	19.2
身分に基づく在留資格 (永住者・日本人配偶者ら)	2,115 (17.1)	2,370 (15.7)	2,432 (13.7)	2,664 (12.7)	2,896 (11.9)	3,017 (11.9)	42.6
特定活動・不明	166 (1.3)	219 (1.5)	267 (1.5)	413 (2.0)	553 (2.3)	742 (2.9)	347.0
合 計	12,372 (100.0)	15,081 (100.0)	17,756 (100.0)	21,026 (100.0)	24,387 (100.0)	25,363 (100.0)	105.0

資料：厚生労働省北海道労働局「外国人雇用状況の届出状況（各年次）」より作成

注）各年とも10月末現在の数値である。

問2) 表1から、外国人人数として最も多かった国籍である中国と、2015年から急増しているベトナムに着目して、外国人人数を自治体別にまとめたものが表3である。北海道で暮らす中国国籍やベトナム国籍の外国人の居住地にかんして、外国人総数と比べたときにどのような地域差が生じているか。また、その地域差が生じる理由は何か。考えられることを述べなさい。(300字程度)

表3 国籍別・自治体別外国人人数(上位15市町村)(2020年)

外国人総数

順位	自治体	人数	構成比	うち女性	女性の割合
計	北海道	34,321	100.0%	18,926	55.1%
1	札幌市	12,634	36.8%	6,254	49.5%
2	旭川市	1,082	3.2%	474	43.8%
3	函館市	989	2.9%	600	60.7%
4	釧路市	815	2.4%	592	72.6%
5	苫小牧市	722	2.1%	271	37.5%
6	帯広市	717	2.1%	333	46.4%
7	千歳市	704	2.1%	374	53.1%
8	江別市	635	1.9%	314	49.4%
9	倶知安町	589	1.7%	231	39.2%
10	小樽市	552	1.6%	314	56.9%
11	紋別市	529	1.5%	439	83.0%
12	石狩市	451	1.3%	273	60.5%
13	恵庭市	438	1.3%	218	49.8%
14	稚内市	435	1.3%	310	71.3%
15	北見市	402	1.2%	209	52.0%

出所：総務省「国勢調査」2020年版より作成。

中国

順位	自治体	人数	構成比	うち女性	女性の割合
計	北海道	9,548	100.0%	5,974	62.6%
1	札幌市	4,573	47.9%	2,593	56.7%
2	函館市	217	2.3%	150	69.1%
3	千歳市	200	2.1%	114	57.0%
4	旭川市	177	1.9%	111	62.7%
5	網走市	176	1.8%	132	75.0%
6	江別市	173	1.8%	79	45.7%
7	稚内市	161	1.7%	110	68.3%
8	雄武町	154	1.6%	106	68.8%
9	釧路市	149	1.6%	123	82.6%
10	室蘭市	148	1.6%	48	32.4%
11	苫小牧市	128	1.3%	62	48.4%
12	佐呂間町	126	1.3%	112	88.9%
13	小樽市	109	1.1%	64	58.7%
14	倶知安町	109	1.1%	71	65.1%
15	紋別市	103	1.1%	99	96.1%

ベトナム

順位	自治体	人数	構成比	うち女性	女性の割合
計	北海道	8,770	100.0%	5,464	62.3%
1	札幌市	1,377	15.7%	614	44.6%
2	釧路市	391	4.5%	300	76.7%
3	旭川市	368	4.2%	124	33.7%
4	函館市	307	3.5%	228	74.3%
5	石狩市	296	3.4%	207	69.9%
6	紋別市	264	3.0%	208	78.8%
7	根室市	262	3.0%	236	90.1%
8	苫小牧市	246	2.8%	73	29.7%
9	別海町	230	2.6%	172	74.8%
10	森町	206	2.3%	166	80.6%
11	帯広市	190	2.2%	53	27.9%
12	稚内市	183	2.1%	162	88.5%
13	江別市	177	2.0%	119	67.2%
14	北斗市	147	1.7%	137	93.2%
15	小樽市	128	1.5%	103	80.5%

出所：総務省「国勢調査」2020年版より作成。

問3) 北海道で暮らす外国人は、今後も増えていくと考えられる。その場合、地域コミュニティとして何が課題になると考えられるか。また、その処方箋として望ましいと考えられることを論じなさい。(300字程度)

学部	経済学部（1部・2部）
教科・科目名	小論文
出題の意図 全体	北海道経済に関連する時事問題として、外国人人口の増加、とりわけ外国人技能実習生について取り上げた。外国人人口の増加に関しては、日常のニュースや新聞記事等でも報道がなされており、とりわけ農業や水産加工業、建設業など、人手不足が顕著な産業分野において外国人技能実習生が増加していることが広く知られるようになっている。特にコロナ禍において、ベトナムからの技能実習生が日本へ入国できず、農業の担い手不足が報じられたことは記憶に新しい。①このような外国人技能実習生について知っているか、②具体的な動向を3つの表から読み解くことができるか、③地域コミュニティにおいて外国人と共生する際の課題や考えられる解決策について、受験生の知識や思考力を総動員して考えられるかを問いました。
出題意図	問1、問2では、提示した表1，2，3が示している事柄を理解し、説明できるかを問いました。また、問3では、地域コミュニティでの外国人との共生における課題やその解決策を、多角的に捉えてられているかを問いました。 ○外国人人数は、2005年から2020年で倍増している。 ○大きなウェイトを占めているのは中国であること、近年はベトナムが急増している。 ○在留資格別外国人労働者数の推移を見ると、外国人技能実習生が最も多い。表1、2か中国人、ベトナム人の多くは外国人技能実習生であると考えられる。 ○外国人人数を自治体別に見ると、札幌圏のほか、道内の地方中枢都市が多いが、国籍別に見ると、網走市や稚内市、雄武町、佐呂間町、紋別市、別海町、森町などが上位に入っている。 ○中国やベトナム籍の外国人は、上記地域の基幹産業である水産加工業や農業に、技能実習生として従事していると考えられる。 ○地域コミュニティの課題：慣習の違いからトラブルになる（騒音やゴミ）、日本語の難しさ、多言語表記ではない、同じ地域に住みながらコミュニケーションがない、外国人に対する偏見など →これらに対する具体的施策、取り組みの可能性
総評	表が示している内容を理解・深読みできているかどうかで出来・不出来が明確に分かれました。また、問3に関しては、「地域課題」→「（考えられる）具体的解決策」を問いましたが、一面的な見方にとどまらず、相手目線に立った課題や解決策を記述した答案もいくつか見受けられました。日頃から地域の経済問題にも関心を寄せてもらいたいです。

学部	人文学部日本文化学科（1部・2部）
教科・科目名	小論文
試験問題	著作権の関係のため公開していません。 ※過去問につきましては、入試課までお問い合わせください。

学部	人文学部日本文化学科（1部・2部）
教科・科目名	小論文
出題の意図 全体	アイヌ語・アイヌ文化研究者として著名な中川裕氏による、アイヌ文化を日本というもののなかに当然あるものとして私たちがどう認識できるかを問う文章から出題しました。 評価のポイントとしては、「課題文を的確に読み解いて要約し、それにもとづいて自らの意見を説得的に展開できるか」、発展的に「人文学、とりわけ日本語・日本文化にかんして興味関心を抱き、日本文化というものを自明視せず相対的なものとして捉えられるか」という2点です。
出題意図	「日本文化」と一般に称されるものは、そのじつ、日本に現にある文化の一部にすぎません。ヤマト文化と同源でなかったり共有するところが少なかったりする、アイヌや琉球の文化、日本に定着した集団移住者の文化も、日本に現にある文化として排除されてはならないものです。 中川裕『知里幸恵 アイヌ神謡集』（NHK出版、2022）の今回の出題範囲は、そのことを、知里幸恵『アイヌ神謡集』が岩波文庫に収められるにあたって、あきらかに日本列島（つまり「日本」）を構成する一文化であるにもかかわらず「外国文学」に収められてしまったことに見られる日本の民族の構造的問題から説き起こし、「日本文化」に収まらない諸文化へわたしたちの意識を誘います。後段では、アイヌ・和人双方の現代人の生活を例にとって、「日本文化」とひとくちにいうことで安易に想像されるような純粋な文化が存在し得ないことを指摘し、そこから自由になって、「日本の文化」という視点を得るべきことを説きます。 北海道の和人文化もまた、このような典型的な「日本文化」から離れて成立したものであり、中川氏の指摘する狭義の「日本文化」と広義の「日本の文化」の相違は、北海道において日本文化を学ぼうとする学生にはすくなく考えねばならない問題です。前段と後段の文章の関係の正確な理解をふくめて、「日本の文化」を積極的に理解していく姿勢が受験生にどれほどあるかを問うべく問題を作成しました。
総評	要約が正確にできていないものが見受けられました。目に付いた単語を理解できた範囲で並べるのが要約ではありません。日頃から、理解を超えた文章であっても、議論の展開を読み取る練習をしてください。「日本文化」ではなく「日本の文化」について問うた意図を読み取れていなかったものが目に付いた一方、地元の文化を例に、「日本の文化」と「日本文化」との対比をした説得力のある議論を展開できていたものもありました。

学部	人文学部英米文化学科（1部・2部）
教科・科目名	小論文
試験問題	著作権の関係のため公開していません。 ※過去問につきましては、入試課までお問い合わせください。

学部	人文学部英米文化学科（1部・2部）
教科・科目名	小論文
出題の意図 全体	英文の【文章１】と和文の【文章２】を読ませることで、次の２つの力を確認しようとしてしました。（１）英語の読解力、（２）英語・日本語の文章を批判的に読み、２つの文章を対比して自分の意見を組み立てる力。 内容的には、なぜ・どのような英語を学ぶべきなのか、英語を学ぶことと日本語を大切にすることはどのような関係にあるのかを考えさせるもので、英米文化学科を志望する高校生が意識していなければならないことです。 何を主張しているかよりも、２つの文章をしっかりとふまえて、論理的で説得力のある文章が書けているかどうかを見ました。
出題意図	問題１は【文章１】の要約です。この著者が、「国際共通語」である英語を世界中の人が学ぶべきものだとしていること、「外国人（非英語母語話者）」の英語を認めたり「外国人」のために英語を簡略化したりすべきではないと考えていること、総じて、英語母語話者の英語こそが重要だと信じていることを読み取れているかどうかのポイントです。 問題２は小論文です。まず、一見したところ英語を重視していないように読める【文章２】の著者の意図をつかむ必要があります。そのうえで、【文章１】の英文と対比しながら、２つの文章の内容を繰り返すだけでなく、自分自身の考えを展開できるかがポイントです。 その際、【文章２】の著者の立場は、英語（教育）を否定する排外主義ではなく、現実的には抗い難い英語至上主義に抗って日本語を維持・継承するには主体的な努力が不可欠だという日本語擁護論なのだ、と把握することが肝要です。そのような理解を議論の前提として提示したうえで、「ネイティブ」の英語に倣うべきという【文章１】と、まずは日本語という【文章２】、この両極の間で、どこに立ってどのように論を進めるかという、文章構成力を問いました。 英語か日本語かの二者択一で考えるのではなく、外国語学習と日本語の発展を両立させるような方向性を打ち出してくれることを期待して出題しました。
総評	問題１は英文が難しかったようで、正確に要約できている答案はほとんどありませんでした。世界中の人が（ネイティブのような）英語を身につけるべきだ、ということがおおむね読み取れていれば良しとしました。 問題２では、【文章１】と【文章２】のどちらかの主張に引っ張られてしまったものが多くありました。同意する場合でも（もちろん反論する場合も）、きちんと根拠（理由）を示している小論文を高く評価しました。

北海学園大学工学部社会環境工学科

令和5年度 学校推薦型選抜（公募制） 小論文試験問題

注意：別紙の解答用紙（2枚）に、それぞれ受験番号と氏名を記入し解答すること。提出するのは解答用紙（2枚）のみである。

問題 以下の文章を読み、設問に答えよ。

日本の国土の面積は全世界のたった 0.28% しかない。しかし、全世界で起こったマグニチュード 6 以上の地震の 20.5% が日本で起こり、全世界の活火山の 7.0% が日本に存在する。また、全世界において災害で死亡する人の 0.3% が日本、全世界の災害で受けた被害金額の 11.9% が日本の被害金額となっている。このように、日本は世界でも災害の割合が高い国である。

近年、北海道においても地震や台風などの自然災害が多発している。2016 年 8 月 17 日～23 日の 1 週間には 3 個の台風（7 号、9 号、11 号）が上陸し、北海道東部を中心に豪雨により河川の氾濫や土砂災害が発生した。2018 年 9 月 5 日には台風 21 号が北海道を襲い、強風によって大きな被害をもたらした。その直後の 9 月 6 日未明には最大震度 7 を記録した胆振東部地震が発生し、厚真町を中心とした周辺市町村に甚大な被害をもたらした。北海道全域で停電（通称ブラックアウト）が発生している。2022 年においても、2 月 20 日からの豪雪被害、台風 11 号や 14 号による被害が生じており、また、地殻変動に関しては千島海溝沿いプレート境界浅部が固着している可能性が報じられ、巨大地震発生の危険性も示唆されている。

このように、近年の災害は頻繁かつ極端な現象として発生していることから、現在、防災・減災対策としてハード面とソフト面の両サイドからのアプローチが行われている。例えば洪水対策であればダムの構築や堤防の強化などがハード面の対策にあたる。ソフト面ではハザードマップの作製・周知や避難勧告・緊急地震速報などの迅速な情報提供が整備されつつある。

以上のように、災害が増加しつつある北海道の地理的素因や地質的素因などの自然的要因や人口や資産の集中度などの社会的要因を考慮して被害を防ぎ、また被害規模を減じるのかを考察することは非常に重要である。

設問 1：近年における北海道な気象・地震などの災害の増加要因について、あなたの考えを 400 字以内で述べよ。

設問 2：増え続ける災害に対して、どのようにすれば防災・減災につながるのか、あなたの考えを 400 字以内で述べよ。

学部	工学部社会環境工学科
教科・科目名	小論文
出題の意図 全体	今年度の出題基本方針は、近年増加傾向にある水害や地震災害、火山噴火などの自然災害について、建設系技術者が一般常識として身につけておかななくてはならない災害の原因とその対策に関して、その理解度を試す小論文の問題を作成しました。我が国の国土は全世界の僅か0.28%であるにも関わらず、地震や活火山が多く、近年は異常気象による台風被害も増加傾向にあることから、災害の発生要因と防災対策について広範囲にわたる対策について、それぞれ設問を設けて受験者の意見を述べる形の問題を出題しました。
出題意図	設問の意図としては、まず災害の原因を問う設問1と、増加する災害に対して土木技術者が行うべき防災や減災に対してどのような対策を取れば良いかを問う設問2を設けました。 まず設問1は、近年の北海道における気象災害の増加原因について受験者の考えを400字以内で解答する問題としました。設問1では、地球温暖化、海水面の温度上昇、変遷風蛇行、海流の蛇行、エルニーニョ現象／ラニーニャ現象などをキーワードとして設定し、これらについて説明が出来るか否か、結果として起こる洪水や土砂災害について広範囲に問う問題設定を行い、どの程度気象災害についての知識があるかを試すものとししました。解答としては、TVや新聞で報道されている内容を期待していましたが、現代の高校生の傾向なのか、情報源として新聞などの文字媒体をあまり見ることが無いためか、意外な難問となってしまった印象を受けました。 次に設問2については、これからの防災・減災について、ソフト面・ハード面の両方に関して対策を考える設問としました。キーワードとしては、ソフト面、ハード面、ハザードマップ、避難訓練、洪水危険水位の見直し、ダムの洪水調整水位、河川堤防、防潮堤、砂防ダム、津波避難タワーなどの建設に設定し、防災・減災の知識を問う問題設定とすることとししました。これも、TV・新聞などでの情報で解答できる設問の意図としています。この設問については、TVや新聞以外のメディアでも比較的簡単に情報を得られる内容であったため、概ね問題の意図に沿った解答を得ることが出来ました。 全体的に見て、出題者は一般論で対処可能な問題を作成したつもりでしたが、受験生にとっては少々ハードルが高かったように感じられました。

学部	工学部社会環境工学科
総評	上記のとおり、出題者としては代表的なメディアであるTV・新聞等に報道されている一般的な気象災害の原因、ならびに防災・減災の方法に関する問題設問をしましたが、受験者の観点からは意外な問題であつたらしく、解答に苦労した形跡が見られました。何らかの災害などに特定すると、受験者が知らなければ何も答えられなくなると思われたため、今回のような一般論で解答出来る問題設定としましたが、情報元の少ない、あるいは興味がない場合には解答が困難で、出題者の意図に反して、受験者にとっては難しい問題になったという印象を受けました。